

〔人間と文化 255 ～ 257 (2017)〕

アメリカ文学史の授業展開

渡 部 知 美

(島根大学法文学部)

A Report on an American Literary History Course

Tomomi WATANABE

キーワード：アメリカ文学史

Keywords：American Literary History

1. はじめに

島根大学法文学部のアメリカ文学講義の授業でアメリカ文学史を担当した経験を踏まえて、専門課程の2年次に初めてアメリカ文学史を学ぶ学生を想定した授業の展開について、どのような方行性・内容で臨むべきか、担当者としての管見を述べてみたい。

2. 授業構築の基本的考え方

紀元前から北米大陸に住んでいたネイティブアメリカンの口承文学にアメリカ文学の起源があるが、当該授業では、17世紀初頭にヨーロッパ人が移住して作った植民地時代以降を扱う。正典とみなされる文学者を中心に扱い、時間が許す限り、女性作家やアフリカ系、日系アメリカ人作家等による文学も扱う。それが多民族社会アメリカの特徴でもある。

また、文学的特徴の誕生には、歴史的必然性がある場合、伝統の無いアメリカ文学独自の特徴でもあるが、実験的試みによる偶然性が関わっている場合もあるが(渡辺2011)(Horton 1974)、歴史に片寄り過ぎない程度に歴史的考察を付け加える。

授業は、受講人数が少数(35人程度まで)であれば、講義と演習両形式で行う。この程度の人数であれば十分演習が可能であり、演習形式を取り入れることで、学生の授業への参加意識を高める。

3. 授業の構成

当該授業科目は、アメリカ文学史の流れを辿りながら、各時代における代表的な作家や作品に触れ、それぞれの特質や時代背景を理解し、知識を深めることを目的とし、図表1のシラバスに示したような内容で授業展開を図っている。

400年のアメリカの歴史の中において、どのような時代がどのような順序で現れたのか、それぞれの時代にどのような文学者がいるのか。時代背景、時代ごとの文学的特質、さらにその時代を代表する作家と作品を取り上げ、講義をする。その後、作品からの抜粋を原文で読み、文学思潮、作家と作品、文学技法についての理解を深め、英語を読む力を伸ばすと共に、文学作品の鑑賞力を身につける。

ヨーロッパとは異なり、広大な空間で、文化的空

白の中で、社会的慣習、制度、常識といった媒介無しに、社会、神、宇宙といった問題に直面せざるを得なかったのである。言わば、素手で、裸で、自らと向き合わざるを得なかったのであり、ここから強烈な自己意識、孤独感、疎外感が生まれた。そして、一方では、伝統を持たないアメリカ人の夢に生きる未来指向性、楽観性という特徴もアメリカ文学は持っている(渡辺2011)。自己と格闘をし、伝統や

前例にとらわれず、自らの運命を選び取っていくという、言わば若者の文学なのである。アメリカ文学の特徴であるこの厳しい自己意識、自我との孤独な格闘(平石2010)を講義の一つの柱とする。

4. 授業の工夫

当該科目は、2年次の開講科目で、2単位30時間の想定である。アメリカ文学の流れを体系的に学ぶ

アメリカ文学史講義の内容

1. 植民地時代(17C-18C後半)

1) ピューリタニズム(神を中心とした信仰の世界)

(1) アメリカ文学の出発

(2) 人間の魂の問題

Anne Bradstreet (詩), Cotton Mother (説教)

2) 啓蒙思想(自然の法則と人間の理性に信頼を置く人間中心の世界)

(1) 大覚醒時代

Benjamin Franklin (自伝)

Jonathan Edwards (大覚醒運動指導者、ダーク・ロマンティズムに繋がる伝統)

2. 独立戦争からアメリカン・ルネッサンス(18C末-19C半ば)

1) 職業作家の出現(←独立宣言・社会の安定)

Charles Brockden Brown, Washington Irving

2) 文明対自然というテーマ

James Fenimore Cooper, Edgar Allan Poe

3) アメリカ・ロマン主義の開花(アメリカン・ルネッサンス)

(産業の発達・西部開拓の進展→楽観主義)

Ralph Waldo Emerson (アメリカの知的独立宣言)

Henry David Thoreau (→20世紀後半のエコロジー運動)

Edgar Allan Poe, Nathaniel Hawthorne, Herman Melville (人間への懐疑、ダーク・ロマンティズム)

3. リアリズムから自然主義へ(19C後半)

1) リアリズム(急激に変化するアメリカの現実にリアリスティックな目を向ける)

Mark Twain (アメリカの知的独立宣言を大衆レベルで達成)

Henry James (心理主義リアリズム)

2) 地方色の文学(ニューイングランド・南部・西部)

3) 自然主義(1890年代)(人間を支配する社会の法則に抵抗)

Stephen Crane, Theodore Dreiser

のも初めて、抜粋であれ、原文で読むのも初めてという学生がほとんどである。

そこで、アメリカ文学の大まかな流れが捉えられるよう、ある特徴の文学的傾向が生まれる必然性を、時代背景も絡ませて考察する講義をしていく。それはアメリカの歴史・社会・文化に触れることでもあり、異文化理解に繋がると考えられる。

文学史の授業は、学生がテキストに頼るという傾向があり、演習形式を取り入れることで学生の授業への参加意識を高め、能動的姿勢を育む。

暗記に頼るのではなく、学生がアメリカ文学の時代ごとの特徴や文学作品の特徴を肌で、心で感じ取れるように、原文からの抜粋を精読する。

5. 今後の課題

女性文学や黒人文学といったマイノリティ文学についての講義も効率的に入れていくことが今後の課題である。また、18世紀・19世紀の英語は学生には難しく、英々辞書を活用し、古い英単語に慣れ親しむようにさせることも今後の課題である。

文献

渡辺利雄（2011）『講義 アメリカ文学史』第I巻

研究社

平石貴樹（2010）『アメリカ文学史』松柏社

Rod W. Horton and Herbert W. Edwards (1974)
Backgrounds of American Literary Thought,
Prentice-Hall, Inc. (Englewood Cliffs, N.J.)

（受稿 平成29年1月23日，受理 平成29年2月7日）

